立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１１年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　英米文学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科英米文学専攻博士課程 後期課程３年	岡本　広毅　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	立教大学文学部英米文学科教授	菊池　清明　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	中世イングランドにおける中英語作品と歴史的意義の考察―民族的・文化的接触という視点から―		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	２０１１　年度		
研究経費	２００　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

主に中英語で書かれたロマンス作品と歴史書物の関連性を複合的な視点から検討した。とりわけ、当時の歴史観を構築したとされる 12 世紀のジェフリー・オブ・モンマスに由来する *Brut Chronicle* の思想的・言語的影響を鑑みながら、中世イングランドにおける民族的・文化的接触・混淆の問題を通して中英語ロマンスを再考した。ジェフリーの年代記の中でも、大陸から傭兵として雇われたサクソン人が先住民のブリトン人を騙し打ちにし、国土を占領するという異民族侵攻の歴史は、実に重要な契機として表されている。この場面において、ラテン語の記述の中でも特異な中英語”wassail”「乾杯」という言葉をサクソン人の発話に記されている意図、そしてブリトン人とサクソン人の一連の歴史的経緯が、同時代のロマンス作品に受容されているのかを同時代の政治的・文化的意味合いを踏まえつつ考察した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　年代記　〕〔　民族的混淆　〕〔　サクソン語 wassail　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

13世紀初頭に書かれたとされる英国ロマンス *Havelok the Dane* に書き込まれた歴史性を検討するために、本作品で数回使用されている “wassail” という「乾杯」を意味する語彙に着目した。(Wyn and ale deden he fete/And made hem glade and bliþe;/Wesseyl ledden he fele siþe.<1245-47>) 本作品が志向するデーン人と異なる地域・文化との接触という主題と、これまで本作品の研究において、注意が向けられることのなかったこの「乾杯」という振る舞いがいかに結びつき、本作品の主題を際立たせているかと同時代の年代記の受容から検討した。

“wassail” という語彙に関して、Smithers は “a toast” や “quaff toast” つまり「がぶ飲みする、痛飲する」 という意味を与えている。従ってこの語彙は、「乾杯する、特にお酒を多量に飲んで騒ぐ」という行為を表し、酒盛りの脈絡において使用されていることが分かる。この語彙は *Oxford English Dictionary* も説明するように、古英語の “wes þú hál” に由来する。つまり “be in good health” 「健全であれ、健やかにあれ」というのがこの語彙の原義で、古英語期においてこの表現は、「一般的な挨拶の表現」として広く用いられていた。しかしながら、中英語期に入り、この “wassail” の意味領域は「一般的な挨拶」から主に酒宴の席で用いられる「乾杯」という具体的な意味へと変化している。*OED* は “wassail” の初出を、ジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニカ烈王史』としており、それはジェフリーがラテン語で記した年代記の中で極めて例外的に用いる中英語の一つであることが確認される。大陸からやってきたサクソン人の族長ヘンギストの娘ロウィーナが発する、“Lord king wassail!”が初例とされている。サクソン人の言葉が分からないブリトン王は通訳に意味を尋ね、王を称賛する挨拶であったことを知り、“drincheil” と応対することを学ぶ。ラテン語の書物の中で実に奇妙に浮き上がるこの英語の “wassail” という「慣習・文化」そしてその「言語」自体が、サクソン人特有のものであったことが推察される。ウァースは『ルー物語』 *Roman de Rou* の中で、ヘイスティングスの戦いの前夜にイングランド人が “wassail, drinkheil” と叫びながら歓楽におぼれていたと記しており、また 12 世紀のパリのイングランドの学生は、あらゆる美徳ゆえ称賛されていたものの、“wassail, drinkheil” の常習者であるとも言われていたようである。こうした受容の仕方を見ても、ロウィーナの発言に由来するこの中英語 “wassail” は、「イングランド人」を指し示す一種のマーカーであったと考えられる。

しかしながら、この語は単に「イングリシュネス」を表す言葉ではない。この言葉がきっかけとなり、ブリトン王はヘンギストの娘ロウィーナと結婚し、最終的にはサクソン人のブリテン島支配へと至るのである。サクソン人の二度目の渡来に関しても、ジェフリーはサクソン人の襲撃の合図として、ラテン語で書かれた文章の中でここでも例外的に “nimet oure saxas” (take our knifes) という古英語を組み込んでいる。このように、ロウィーナの用いる “wassail” は、ヘンギストがブリトン人を裏切り、虐殺する際に発せられる “nimet oure saxas” という言葉と共鳴しており、実に不穏な合図として表されているのである。サクソン人との祝宴の席で発せられる “wassail” という中英語は、ブリトン人にとって理解不可能な異質な言語であるだけでなく、ブリテン島が異民族に取って代わられる一国の存亡の危機を象徴的に暗示しているのである。

不吉なニュアンスを多分に含む語が、*Havelok* が書かれる 13 世紀の終わりから 14 世紀の初頭までの受容を確認すれば、本作品での使用の意図がより鮮明に浮かび上がる。ジェフリーの年代記は言うまでもなくアーサー王文学の源泉となり、汎ヨーロッパ的な影響力を持つ書物となった。このサクソン人到来の物語と中英語の使用も、後の年代記者にもほぼ忠実に受け継がれていることが判明した。“wassail” 「乾杯」と “nimet oure saxas” 「ナイフをとれ」というサクソン人の言葉は、ほぼ例外なく踏襲され、サクソン人到来のエピソードには欠かせない重要な言葉であった。初めての英語に翻訳したラハモンは、たとえばヴォーティガン王の前でグラスを掲げた際に発する “wassail” という言葉を、王の弟のヴォーティマーを殺害する場面でも記すことで、両場面の有機的つながりを明確にし、“wassail”に含まれる 「毒殺」の意味をより強く喚起させている。

研究成果の概要　つづき

この点で、ラハモン以上に *The Short English Metrical Chronicle* の特定の写本の中に含まれる記述は注目に値する。作者は 6 世紀から 7 世紀のイングランドの歴史を語る中で、突如「“wassail” と “drynkheil” がこの国に伝来した」と言及し、“Wassail y schal sai to þe king/ and sle hym withoute lesyng” (310-12) とあるように、ジェフリーの年代記において、ブリトン人殺戮の合図の言葉が “nimet oure saxas” の代用として “wassail” を暗殺の合図として描いているのである。しかしながら、“wassail” が内包する意味合いを汲み取り、それをエピソード内で露骨に表現している事実は “wassail” の負の受容の一端として実に示唆に富んでいる。

こうした歴史的受容を踏まえ、13 世紀の初頭に書かれた中英語ロマンス *Havelok* の再考を試みたい。何より、本作品はイングランド東部のヴァイキングの歴史的・文化的遺産の中で生み落とされた作品であることは多くの研究者が指摘している。それゆえ、イングランドとヴァイキング侵略の歴史の “revisionist”として、とりわけ侵略者・掠奪者としてのデーン人の固定観念を捉えなおそうとする詩人の戦略的試みが投影された作品である。同時代の年代記以外の文脈で用いられることのないこの “wassail” という語彙が本作品に使用されているのは極めて意図的であると考えられる。”wassail”が記される本作品の酒盛りの場にデーン人ハヴェロックが関与している点を考える。これはデンマークからイングランドへと逃れ、リンカンシャー地域で名を馳せ、その地域で評判の人物となった後のことである。ハヴェロックは地域の人々と積極的に交わることで自己のアイデンティティを確立した。この文脈において、通常は「イングランド人特有の風習」である “wassail” をハヴェロックの振る舞いとして与えることは、デーン人の彼が一個人としてイングランド社会に順応し、同化した文化的接触の証として捉えることができる。さらに、この場面で「乾杯」を交わすのが、「デンマーク皇子のハヴェロック」と「イングランド王女のゴールドバラ」であるという点は本作品の性質上、極めて重要である。とりわけ、二人の結婚後にハヴェロックの第二の故郷であるグリムズビーで二人が「乾杯を重ねている」ことは、大陸を隔てた両国家・両民族の融合と調和という物語の結末を占う極めて象徴的な振る舞いである。ジェフリーの年代記以降の文脈では、「ブリトン王の王妃」となるロウィーナが、一国の破滅を暗示する不吉な言葉として “wassail” を用いていたのに対して、ハヴェロック詩人は「イングランドの王妃となるゴールドバラ」がハヴェロックをはじめとするデーン人と飲食を共にする極めて好意的な表現として使用しているのである。それゆえ、年代記とは趣が異なるこの語の使用に、イングランド人とデーン人の「多文化社会共生」を志向する詩人の意識が投影されていると考えられる。すなわち、ハヴェロック詩人はこの語に漂う不穏な空気を取り払い、この語の背景に潜む「血塗られた民族間の争い」という問題を、反対に「民族の友好と共生」の主題へと書き換えたのである。ハヴェロック詩人は「他者の侵略の痕跡」が刻み込まれたこの言葉を肯定的に、そして劇的に記し、本作品が標榜する「多民族・多文化性の共存・尊重」というテーマへと昇華させたと結論付けられる。

中英語で書かれた「ロマンス」として一連の虚構性に満ちた作品を捉えるだけでは、それぞれの作品に横たわるイングランドの歴史性・政治性を見逃してしまうこととなる。本研究では、テクストの細部に書き込まれた語彙をヒントに、作品誕生の背後にある社会的・文化的要因とのつながりを明らかにした。中英語期のイングランドにおいて、デーン人の表象はとりわけ「掠奪・破壊・殺戮」を喚起する極めて否定的なものであったが、*Havelok* では、主人公のデンマーク皇子がイングランド社会に積極的に関わり、その社会・人々と同化していく過程に焦点が当てられている。その一つの象徴的な意味合いが、イングランド王女ゴールドバラとの結婚直後の宴で行う “wassail” という動作に込められている。ハヴェロック詩人は、ジェフリー・オブ・モンマスの年代記以降、サクソン人の侵攻の爪痕が刻み込まれた「極めて血腥く残虐な」この言葉を肯定的に書き換え、「異民族・異文化の融合・調和」というシナリオと見事に結び付けたのである。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④　その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①

1.「“Hise uten-laddes *here* comen”: Exploiting the Image of the Dane in *Havelok the Dane*」
（『神話・象徴・図像』篠田知和基 編著. 楽浪書院, 2011. 69-84）

④

1.「Contesting English History: From ‘here’ to ‘ferd’ in *Havelok the Dane*」
（International Medieval Congress [国際中世学会], Session1314 Title: English Romance, Nation, and (Obscene) Scribal Innovation, 2011 年 7 月 11-14 日, University of Leeds [英国リーズ大学]）

2.「中英語ロマンスと年代記に映し出されるデーン人の表象」
（日本英文学会関東支部第 5 回大会, 2011 年 11 月 5 日, 慶應義塾大学）

3.「サクソン人到来の歴史と中英語 “wassail”」
（2011 年度立教大学英米文学会, 2011 年 12 月 17 日,　立教大学）